



Title	<紹介>尾崎千佳著『西山宗因の研究』
Author(s)	浅井, 美峰
Citation	語文. 2024, 123, p. 43-44
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100244">https://doi.org/10.18910/100244</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 紹介

### 尾崎千佳著『西山宗因の研究』

浅井美峰

本書は、近世初期の連歌師・俳諧師である西山宗因に関する論考をまとめた論文集である。尾崎氏は『西山宗因全集』（以下『全集』と略称する）の編集に携わられるなど、宗因研究の第一人者であり、その研究成果が一覧できる形になったのは大変有り難いことである。宗因に関する専論の研究書はこれまでなく、これからの研究の基盤となる書であるとともに、宗因の研究史における大きな一つの到達点を示すものと言えよう。

本書は、第一部「俳諧師宗因の虚と実」、第二部「連歌師宗因の实と虚」、第三部「西山宗因年譜考証」によつて構成される。

第一部は、晩年の宗因が俳諧から距離を取り、連歌に再び強い関心を寄せるようになったという定説（「宗因連歌回帰説」）が谷素外の言説に起源を持つことを明らかにし、それが無批判に受容されてきたことを挙げ、宗因の連歌俳諧に対する姿勢や心境は「確実な資料」をもとに考えていくべき、とする第一章「晩年の宗因―宗因伝記研究をめぐる覚書―」によつて始まる。この問題意識は第一部のみならず、本書全体に通底すると言つて良い。すなわち「確実な資料を積み重ね上げ」て到つたのが以後の各論考であり、第三部の重厚な年譜考証なのである。

第一部の残りの四章では、「俳諧師」としての宗因を取り巻く伝

記的問題を取り上げている。第二章「宗因顕彰とその時代」では、安永期に大阪・江戸でそれぞれ行われた句集編纂をはじめとする宗因の顕彰について、当時の談林俳諧の置かれた状況と、その権威付けの問題として論じる。第三章「宗因における出家とその意味」では、作品享受者に応じて使い分けられた号の在り方等から宗因の出家の実状を探っている。第四章「宗因と伊勢・統紹」では宗因と伊勢の関係について、先行研究で指摘される荒木田氏富との関係のみではなく、連歌俳諧を通して幅広い階層の人々と交流があったことを作品・資料によつて示し、「守武流」俳諧標榜の意味を、地方と大坂を往き来する宗因の在り方から明らかにしている。第五章「連歌師宗因の俳諧点業」では、宗因の俳諧評における褒詞の儀礼的性格を指摘しつつ、宗因の俳諧評点資料の傾向、俳諧師たちから批判が出るほどの俳諧点者としての旺盛な活動と、そこに見える意識について書かれている。

第二部では、宗因の「連歌師」としての活動を、複数の自筆資料から詳覧し、各作品（紀行文、連歌）とその読者の問題を描出する。

第一章の「肥後道記」の典拠と主題」では、諸本・構成を整理し、『源氏物語』引用から主君加藤正方の再祈祈願という主題を導き、読者に正方本人と加藤家旧臣を想定している。続く第二章「陸奥・行脚とその紀行」でも複数自筆本が残る奥州紀行について、諸本の差異（亡娘追悼の百韻で終わる系統と、百韻がなく天下への祝意をもつて終わる系統）は、宗因自身の手によつて読者（贈り

主)に合わせて結末の内容が改変されたためとする。第三章「大坂城代青山宗俊との交渉」は、天満宮連歌所再興に向けて活動した宗因の「連歌師」としての姿を、大坂城代と、その下屋敷に入りする文化人たちとの関わりにより描いている。第四章「明石山庄記」と「明石浦人丸社千句」では、『明石山庄記』の想定読者(松平信之)と成立事情、『明石浦人丸社千句』興行の目的(松平信之当厄祈禱)から、大名家と関わる宗因の活動の様相を明らかにし得ている。

第五章「主従の連歌から職業としての連歌へ―近世武家社会における連歌の情理―」ではまず、肥後加藤家の文事・政治を取り巻く状況、そこに参入する宗因の連歌修行と連歌事績、加藤家改易後の正方と宗因主従の生活、正方による再士官運動、晩年の正方について記す。そして、正方死後に天満宮連歌宗匠として活動を本格化させる宗因、職業連歌師としての諸国行脚、小笠原家における宗因連歌の意義を跡付ける。丹念に宗因の活動とその背景が時系列に沿って活写されている。近世武家社会における宗因連歌の在り方を、前半生の主従関係における情誼的側面と、後半生の職業としての合理的側面に着目して描き出し、その姿勢が俳諧師宗因へと続いていくという視点は、先行研究で固定化した「連歌師」「俳諧師」としての位置づけを与えられてきた宗因を、連続する動的な主体として位置づける点で画期的である。この先、宗因研究において必ず参照されるべきであるのはもちろん、連歌史、俳諧史、近世文学史に対しても新しい視点を提供する論考である。

さらに、第三部は本書の後半三九〇頁を占め、『全集』第五巻収載の「西山宗因年譜」に基づきつつ、それを増補改訂した宗因の年譜と膨大な各事績への考証を収めている。例えば、第二部第三章で描かれた大坂城代青山宗俊との関係の見える延宝五年、宗因七十三歳の事績は、二十一項目について依拠資料を挙げ、判明している限りの解説が付され、十六頁五百行余りに及んでいる。年によって増減はあるが、宗因誕生の慶長十年から没後一年の天和三年まで(一六〇五―一六八三)の宗因関係の動向を網羅している、と書けばそのボリュームが伝わるだろう。

もちろん、驚くべきはその量だけではなく、宗因の各時点、各地域、各作品での有り様を厳密に描き出す考証にある。「行動」を描く、と著者が述べる通り、宗因がその時にどのような活動をしていたのかの動態が年譜から立ち現れてくるのである。『全集』未収録の資料についても年譜に増補されており、『全集』と本書を並べること、宗因研究の進展の第一線を見ることができると「事実の検証なしに虚構を論じることはいけない」とする著者が、静態的文学史ではなく、宗因という人物の生涯と作品を生き生きと描き出した好著である。本書により令和六年度芭蕉祭、文部科学大臣賞を受賞されている。

(八木書店、二〇二四年三月、七〇四頁、一二、〇〇〇円+税)

(あさい・みほ 本学准教授)